
甘すぎる飴

斉藤寧子

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

甘すぎる飴

【Nコード】

N2476C

【作者名】

斉藤寧子

【あらすじ】

引きこもりの女子高生が二年ぶりに外出する。チャットで知り合った同じ引きこもりの男性と出会ったためだった。彼女は彼とのチャットで新たな自分を見つけ、その自分を確かめるために、外出する。そして、その新しい自分の可能性とは・・・Mの道だった。

1話 「行動」(前書き)

久しぶりです。斉藤寧子です。この元々の作品は以前にここで発表し、その後、私の短篇集「ゆわゆら」も掲載された作品です。色々賛否両論があつて、様々な感想も頂きました。その時は、あえて言葉を省いたり、消していた部分もあるのですが結果、本質をぼやかしてしまった感があるなど最近思い直してきました。今回加筆、修正を加えて新たな作品に仕上げられればなど、思います。

この作品のテーマは「居場所」です。

例え社会から不道德な物と見なされている場所でも、その本人が希望を持って生きられるなら、そこは紛れもない光ある居場所です。以前読んだ方も、初めて読む方も、何か感じ取ってくれば嬉しいです。

1話 「行動」

「いつてらっしやい」

「ん」

靴に履き替える私。

驚く母。

うん、無理もないと思う。二年振りの外出だったし。確かに唐突と言えば唐突かな？でも、ま、私にとっては全然唐突じゃないんだけど。結構前からの予定だったのよ？この日を待ち遠しく思ってたんだから！でもねえ、一つ気掛かりだった事があるの。それは、外出する際に一々、こまごま訪ねられる事。

どこ行くの？とか。

もう大丈夫なの？とか。

何時に帰ってくるの？とか。

ああ、邪魔。そんな会話が煩わしい。構われる事が鬱陶しい。気持ち悪いわ、ほんと。まさに、外出する気掛かりが、それ。なんかむかつく。引きこもりの私を特別視しないでよ。かと言って、変に甘い声で接せられる事も不愉快。頑張つて！とか。私も一緒に出掛けようかな？なんて母親面したり。ああ、考えるだけで身震いがする。

でも偉いものね。いつてらっしやい、母はただそれだけの言葉を私に投げ掛けた。うん、一応は娘の気持ち解つてる。この構つて欲しくないオーラを見抜いてる。偉い偉い。少しは母を見直した。敢えて行き先を聞かない、母。うん、その方がいい。私の行動に水を差されては困るしね。折角の行動なんだし。余計な気遣いはかえって、ね・・・こつちが恐縮してしまう。

全く、ほんと・・・引きこもりも楽じゃない。もつと自由にさせてほしいわ。別に悪い事してる訳じゃないんだし。やれやれ、ね。私が引きこもつたのは十六の時。別に無視された訳でもない。いじ

められた訳でもない。学校が嫌だった訳でもない。友人がいなかった訳でもない。ま、強いて言えば・・・学校に行く理由がなかった。見つからなかった。それぐらい。勉強もしたくなかった。部活もしたくなかった。友達と会えるって言ってもね・・・毎日毎日、顔合わせてたら飽きちゃうし。

うん。

毎日ケーキは飽きるでしょ？毎日お寿司は飽きるでしょ？どんなに大好きな物でも毎日は無理。飽きちゃう。だから、学校に通う行為自体、飽きた。第一、学校その物が好きじゃないし。引きこもったのは当然の結果。道理よ。一応、進学校らしかったけど。私には関係なかった。母が要望したから受けただけ。母が要望したから勉強しただけ。ただ、それだけ。で、私は、その要望に応えた。要望は叶えた。で、私は決めた。要望は終わり。止めよう、って。もういいや。勉強なんていいや。学校なんていいや。大学なんていいや。で、二年引きこもった。自分の生活。自分だけの生活。人の眼を気にせず。人の口に従わず。

快適な毎日だった。寝たい時に寝て。起きたい時に起きて。食べたい時に食べる。ある意味、人間らしい生活よね。全然、苦じゃなかった。寂しいなんて思わなかった。そして、その二年間で、私は見つけた。私は、私を、見つけた。

生きる意味。生きる楽しみ。生きる目的を私は見つけた。メールチャットに私は興味を持った。最初は興味なかったけれど、そこにあなたがいたの。あなたを見つけてしまったの。

同じ引きこもり。

同じ理由で。

同じ境遇。

同じ性格。

同じ願望。

同じ欲求。

同じ逸脱。

甘すぎる飴

同じ刺激。

同じ逃避。

同じ不満。

顔を合わせる事もないし、好きな時間でメールもチャット出来るから飽きないしね。

そして今日、私はあなたに逢う事に決めたの。

2話 「接触」

今日の待ち合わせ場所は地下鉄中島公園駅。その一番右の切符売り場。

約束の場所。

約束の服装。

私は白のシャツ。髪はショートで紺のジャケット。グレーのプリーツスカートなんて何年ぶりに履いたんだろうか？ああ、久しぶりの地下鉄。人の流れが嫌。相変わらず混んでるし。二年前から何も改善されてない。もっと地下鉄も乗りやすくなってると思ってたけど、淡い幻想を抱いてたみたいね。人がうざいわ。目障り。酔う。

「・・・」

そんな気持ちで落ち着かない時、私は飴を舐める。

昔から飴を舐めると、何故か気分が落ち着いた。鞆にはいつも入ってた。そうね、安上がりな精神安定剤ってとこ。ま、チョコも落ち着くんだけど、太るからまだ飴の方がいい。寝る前にも必ず舐めるのよね。快眠になる。寝起きが爽快になる。良い夢が見られる。或いは夢を見る事なく、ぐっすり寝られる。そして昨日は・・・昨日は寝る前に一袋空けた。飴を舐め続けた。眼が冴えた。喉が乾いた。眠れなかった。

それだけ緊張してた証拠。

それにね、震えるなど言う方が無理。二年振りに家族以外の人と会うんだもの。メールだけのあなたと、ね。

「美鈴さん・・・？」

「・・・はい」

あなたの目印は傘。緑色の傘。遠目からでも見つけられたわ。だって外は晴れたもの。緑色の傘が妙に映えていた。私に声を掛けたあなた。

震える声、私もあなたも。

俯く私。

見つめるあなた。

上がる脈拍。

乾く唇。

吹き上がる汗。

私は周りを見渡した。

小さな駅。

もう人はいない。

もう大丈夫。

私は、スカートを捲り上げた。

下着は約束通り付けていない。

あなたの視線が下に向く。

私は俯いたまま。

恥ずかしい。

死にそう。

逃げたい。

でも・・・脚が竦んでる。

いや。

絶対。

きつと。

もし動けたとしても、私は逃げない。私は、今を楽しんでる。この初めての感覚に酔っている。

あなたの紅い頬。

私の頬も同じ色。

「じゃ、行こうか・・・」

私は小さく頷いた。

あなたは照れて先に行く。

私は小走り追っかける。

挨拶程度の会話。

会話は二言、三言。

甘すぎる飴

それだけ。

あなたは歩く。

私は後を追う。

私は、もっと声を聴きたい。

あなたの声を、もっと、長く、生で。

3話 「秘事」

チャットで話しただけのあなた。メールで話しただけのあなた。文字だけの関係。それで成り立っていたあなたと私。画像も配信してくれたあなた。音声も配信してくれたあなた。そして私は、あなたに興味を持った。それから、あなたに恋をした。そんなの恋とは言わないわ！実際に会ってもいないで好だなんて！なあんて言う頭の固い人間は無視しましょ。

初めて生で観るあなたは、やっぱりどこか魅力的。俗世界から離れた孤高な感じがする。まるで、私の生き写し。同じ匂いが漂っている。どこにも居場所がなくて、存在感もなくて、ただただ生きている感じ。でも・・・空虚じゃない、廃墟じゃない。心の内に潜む、何か妖しい光が漏れてるわ。

小声のあなた。

内気のあなた。

小心者のあなた。

人見知りのあなた。

眼を見て話せないあなた。

だけど、あなたの秘めた心を私は知ってるの。その逸脱した性格に私はそそられたの。

そう、互いに逸れてしまった人生の道。そして今、その逸れた道が交わってしまったのよ？ああ、逸れてしまったお陰で、私たちは出逢えたの。なんて幸せな運命！真っ当に生きてたら出会えない人生なんてロマンティック！

「じゃ・・・」

「うん」

私達はホテルに入る。初めてのホテル、私もあなたも。

部屋は五階。

あなたは私を見つめてる。

私もあなたを見つめてる。

でも、内気なあなた。

見つめる場所は私の首みたい。
そう。

私は、見つけた。

私を、見つけた。

人には言えない。

あなただけ、あなたにだけ。

私は、あなたを待っている。

あなたの命令待っている。

いつものあなたを待っている。

エレベーターの前。

あなたは私に囁いた。

あなたは私に呟いた。

私は小さく頷いた。

五階の部屋まではほんの数秒。

私は急いでジャケットを脱ぐ。

私はシャツのボタンに手を掛ける。

エレベーターの扉が開く。

先に乗るあなた。

そして私。

私は急いでシャツを脱ぐ。

下着は約束通り付けていない。

あなたは私の服を持つ。

私はあなたに背を向ける。

急いでスカートに手を掛ける。

すぐ脱げるスカートを履いてきたの。

私はまだ背を向けたまま。

そのままスカートをあなたに渡す。

開くエレベーター！。

人はいない。

私はそのまま歩き出す。

靴下。

靴。

それだけの姿。

あなたは後ろを歩いている。

鍵はあなたが持っている。

服もあなたが持っている。

そう、この刺激。

私はこれを望んでいた。

あなたは私を見ずに部屋に入る。

あなたはソファァーで足を組む。

私はベッドに潜り込む。

私はあなたに視線を送る。

普段のように。

いつものように。

私に命令して欲しい。

文字じゃなくて、あなたの声で。

私は奴隷。

あなたの奴隷。

私を辱めて。

私を縛って。

私物にして。

暴言を吐いて。

踏みにじって。

私は。

あなたに。

励むだけ。

尽くすだけ。

奉仕するだけ。

甘すぎる飴

忠義するだけ。

犬になる。

猫になる。

鳥になる。

あなたの物になる。

痛くても。

強くても。

初めてでも。

優しくしても。

虐げられても。

道具を使っても。

私はあなたを待っている。

私は変かも。

でもいいの。

気付いたの。

解ったの。

それが私。

それがあなた。

私は被虐愛者。

あなたは荷虐愛者。

私はマゾヒスト。

あなたはサディスト。

今までは文字だけで。

今日は行動で。

求む私。

求められる私。

求むあなた。

求められるあなた。

存在意義。

存在意味。

甘すぎる飴

存在理由。

存在狭義。

存在確認。

あなたの命令。

それで私が存在出来る。

それで私が生きられる。

命令は私に興味があるから。

命令は私を求めているから。

命令は私を必要としているから。

命令は私を必須としているから。

4話 「愛事」

裸体に染まる私。

さつき初めて会ったばかりのあなたに、私は身体を捧げるの。

何？この興奮？

何？この緊張？

何？この・・・背徳感。

そして、心の奥底に蠢く優越感。

私は、あなたに従う。

私は、あなたに応える。

私の為に、あなたの為に、私は私の身体を預けるわ。

懇願する私。

嘆願する私。

二人の為に。

心待の時間。

恋慰の時間。

奉仕の時間。

求索の時間。

至福の時間。

従順の時間。

心音の時間。

吐息の時間。

喜悦の時間。

満悦の時間。

愉悦の時間。

喜気の時間。

喜憂の時間。

愛楽の時間。

愛玩の時間。

甘すぎる飴

愛戯の時間。
愛重の時間。
愛心の時間。
愛念の時間。
愛納の時間。
愛撫の時間。
愛慕の時間。
愛養の時間。
愛恋の時間。
恋尽の時間。
情思の時間。
情実の時間。
情調の時間。
蓬頭の時間。
抱擁の時間。
熱情の時間。
愛育の時間。
情欲の時間。
愛欲の時間。
真実の時間。
充実の時間。
私は捧げた。
私は捧げた。
あなたに捧げた。
あなたに捧げた。
この事を知った大人はどう思うかな？
蔑む。
見下す。
卑しめる。
見下げる。

大半の人がそう思う。この事を知ればそう思う。大体、登校拒否
ってだけでも、世間的立場は狭い。それだけでも陰口を叩かれる。
それだけでも冷たい視線を送られる。そして、そこに引きこもり・
・更に立場は狭い。更に陰口を叩かれる。更に冷たい視線を送られ
る。そして、そこに追い打ちのように、ネット上からの出逢い。そ
こから不品行な行為。

完全に立場は狭い。

完全に陰口を叩かれる。

完全に冷たい視線を送られる。

ただ、それは露呈した時の話。

ただ、それは露見した時の話。

ただ、それは発覚した時の話。

絶対秘密。

絶対秘密。

今は私だけの物。

今は私だけの時間。

今は私だけの世界。

5話 「開眼」

そう。

私は生きる糧を見つけたの。例え世間が認めなくても。例え世間が冷笑したとしても。例え世間が嘲笑したとしても。例え世間が物笑いしたとしても。今はこれでいい。今はそれでいいの。

「・・・痛くなかった？」

「・・・うん」

虚実が入り混じる外の世界。

真の自分を拒否する外の世界。

嘘の自分を受け入れる外の世界。

私は私。

だから内の世界に住居した。

だから外の世界を投げ出した。

簡単に言えば・・・外の世界が怖かった。

でも今は違う。あなたがいる。

真実の世界。

二人だけの世界。

もう外に出るのも怖くないかな。

もう視線を気にしなくてもいいかな。

もう飴を舐めるのも少なくなるかな。

私はお風呂で身体を洗う。

私はお風呂で自分を洗う。

私はお風呂で過去を洗う。

私はお風呂で暖まる。

染みる身体も心地いい。

腫れる身体も心地いい。

震える身体も心地いい。

この刺激。

この謳歌。

この逸楽。

この充実感。

ソファでコーヒー私とあなた。

優しい言葉の優しいあなた。

肩を並べて素に戻る。

肩を並べて私に戻る。

肩を並べてあなたは戻る。

肩を並べていつもの心。

俯いたままの私とあなた。

気恥ずかしさの私とあなた。

衣服に着替える私とあなた。

不安そうに優しいあなた。

私を気遣う優しいあなた。

あなたは別人のよう。

さっきまでは・・・私を罵倒したあなた。

私を痛罵したあなた。

私を面罵したあなた。

私を嘲罵したあなた。

私を悪罵したあなた。

私を冷罵したあなた。

でも。

今は。

私を気に掛ける優しいあなた。

今のあなたが虚実なの？

サドのあなたが虚実なの？

どちらのあなたが虚実なの？

紙一重ね。

心の表裏も。

虚実と真実も。

でもね、瞳が充血してるあなたが好き。

汚い言葉を吐くあなたが好き。

強引に驚掴みするあなたが好き。

私を拘束し続けるあなたが好き。

私は自信がついた。

私は私を曝す。

私は私を暴く。

私は私を開く。

私は私を濯ぐ。

そう、他人の視線なんて気にしない。

そう、他人の意見なんて気にしない。

そう、他人の常識なんて気にしない。

そう、他人なんて。

頷きなんていらぬ。

同調なんていらぬ。

同情なんていらぬ。

理解者なんていらぬ。

私は私を見つけたんだから。

怖い物なんてないんだから。

守る物なんてないんだから。

なくす物なんてないんだから。

そうよ。

今日のこの日に比べたら、他の出来事なんて何の価値もないわ。

ああ、今日はいい日。

だって新しい私が生まれた日なんだもの。

新しい道が示された日。

新しい生き方を開眼した日。

ま・・・表立って人には理由を言えないけどね。

甘すぎる飴

うん、明日から何しよう？

意外に積極的な私だわ。

美容室に入った。

喫茶店に入った。

お店に入った。

服を買った。

靴を買った。

靴を買った。

口紅を買った。

時計を買った。

帽子を買った。

指輪を買った。

化粧水を買った。

ベルトを買った。

ピアスを買った。

バレッタを買った。

猫の置物を買った。

コンシーラを買った。

ネックレスを買った。

ブレスレットを買った。

アングレットを買った。

マニキュアを買った。

赤いスリッパを買った。

海に行った。

散歩を始めた。

映画にも行った。

スキップをした。

日向ぼっこした。

ブランコに乗った。

煙草を吸った。

お酒を飲んだ。

眼鏡を変えた。

耳に穴を空けた。

枕を変えた。

布団の色を変えた。

ポトスを置いた。

お香を炊いた。

背伸びをした。

柔軟運動を始めた。

ブロッコリーを食べた。

トマトを食べた。

私は。

私を見つけた。

決めた。

引きこもってる場合じゃない。

何事も経験が大事。

立ち止まってちゃあ。勿体無い。

今日、改めて、そう感じた。

そうよ。今日から私は自分を主張して生きる。

だって真実の私を見つけたんだからね。

私の真実はSM。

そして。

私は。

私はMなんかじゃない。そんなの、ただの思い込みだった。経験して理解出来た。やっぱり何事も経験なのね。

そう、私は荷虐愛者。

ええ、私は荷虐趣味者。

私はS。

今はSを経験したい。

相手から責められたい・・・そう思うMな私は事実。でも、完全な受身じゃあなかった。どう責められたいか、どう苛められたいか、どう愛されたいか・・・頭と心の中で願望が沸いてきた。

自分の中にある責められたい願望を達成させる為に、私は彼を誘導した。声や、言葉、身体や視線。私にある全ての部位で、あなたを誘惑し、レールに乗せて、操った。つまり、

『私は、あなたに責められ、あなたは私を責めていた』のではなく、『私は、あなたが責められるように、受けの姿勢であなたを支配、責めていた』の。

意識の問題だわ。

紙一重。

いつのまにか、私はあなたの心を掌握していた。

そう、そうなのよ。相手を思いやる気持ち、相手の身になって考える気持ちがないきゃあ、何事も駄目って事ね。Sの気持ちだってそう。自分勝手な振る舞いは相手を傷付け、何も生まれない。相手は何を望んでいるか、何を欲しているか、次はどうされたいか、どうされるのが一番好きか・・・常に考えてなきゃ駄目。その時は、自分がMのつもりで考えんきゃあ、現実味が無い、真剣味が足りない。SにするMにする、お互いに本気で相手を知ろうと努力しなければ・・・ただの変態になる。

ああ、人を思いやるって素敵！

うん。

決めた！

女王になろう！

札幌の女王にね。

ふふ、意外に積極的な私。

となれば、引きこもってる場合じゃない。

もう、引きこもりはお終いね。

まあ・・・理由は公然と言えないけど。

さて、と。

甘すぎる飴

とりあえずは鞭でも買おうかな。
あと、色々な物を詰め込む大きな鞆もね。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2476c/>

甘すぎる飴

2008年11月7日07時23分発行